

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：16101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03210

研究課題名(和文) 縄文/弥生移行期における集落・地域社会の変化に関する研究

研究課題名(英文) The study of change of settlement and community from Jomon to Yayoi period

研究代表者

中村 豊 (NAKAMURA, Yutaka)

徳島大学・大学院社会産業理工学研究部(社会総合科学域)・教授

研究者番号：30291496

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：従来、縄文/弥生移行期における集落・地域社会の変化に関する研究に取り組む上で、縄文時代晩期末の集落像が明らかではなかった。

徳島市の眉山北麓に位置する徳島市三谷遺跡は、低湿地に面した貝塚と隣接する、微高地上に集落が見出されていた。今回の研究では、微高地上集落の発掘調査をおこない、縄文/弥生移行期の遺構を検出してその広がりを復元するとともに、旧河道南西側対岸に想定される微高地の調査にも着手した結果、縄文/弥生移行期の遺構を検出した。

以上の成果から、河川が蛇行する両岸に、土器1型式程度の期間営まれた、縄文時代晩期末における地域の中核的集落像を復元することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、縄文/弥生移行期における集落・地域社会の変化に関する研究に取り組む上で、縄文時代晩期末の集落像が明らかではなく、その解明は喫緊の課題であった。

徳島市三谷遺跡では、すでに、低湿地に面した貝塚と祭祀空間の存在がわかっていた。隣接する微高地上に集落が見出されていたものの、ごく一部の検出にとどまっていた、今回の研究にともなう発掘調査において、集落の広がりを推定するとともに、旧河道南西側対岸微高地においても、縄文/弥生移行期の遺構を検出した。

以上の結果、今後の遺跡調査・同じようなテーマを研究する際、参考となるような、縄文時代晩期末の地域における中核的集落像を復元することができたといえる。

研究成果の概要(英文)：Until now, On the occasion we tackle the study concerning change of settlement and community from Jomon to Yayoi period, it is not evidence that the landscape in the final stage of JOMON period. MITANI site locate at north foot of Mt. BIZAN, SHIKOKU island, Western JAPAN. In this site, discovered shell midden face the waste-filled valley and settlement on the slightly high land. The present excavation, we reconstructed settlement earea on the slightly high land and the south-western bank of the waste-filled valley in the final stage of JOMON period. From the above results, we can reconstructed the reconstructed chief settlement located on the both banks slightly high land of meandering channel.

研究分野：考古学

キーワード：縄文/弥生移行期 地域社会 縄文集落 弥生集落 貝塚 微高地 低湿地 三谷遺跡

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

縄文時代から弥生時代への移行は、日本史上屈指の画期である。従来この画期は、狩猟採集経済から農耕経済への変化と考えられてきた。一方で、レプリカ法などによる研究の進展によって、縄文時代にも農耕の存在が明らかとなってきた。こうした動向をふまえて、今一度基礎的な研究を通して縄文時代から弥生時代への移行をとらえなおすことが要請されていたのである。

### 2. 研究の目的

縄文/弥生移行期における集落と地域社会の変化を考えるにあたって、弥生時代前期の集落と比較して、縄文時代晩期後葉の集落像は意外なほど調査事例が少なく、明確ではなかった。

そこで、すでに低湿地に面した貝塚(遺物廃棄場)兼儀礼空間の存在が明らかとなっている徳島市三谷遺跡の発掘調査を通して縄文時代晩期末の集落像を可能な限り復元する。そうして、既存データの揃っている弥生時代前期の集落との比較研究をおこなう前提条件を作ることを目的としたい。

### 3. 研究の方法

徳島市三谷遺跡では、既に1924・1925年(森1926a〔4〕・b〔5〕)、1990・1991年(勝浦編1997〔1〕)の調査で埋没谷やこれに面する貝塚が検出されていた。その周辺微高地上に集落の存在が予想された(中村編2017〔3〕)ため、今回の研究による発掘調査を通して微高地上に位置する集落のおおよそ規模を推定する。さらに埋没谷南西側対岸にも存在を想定された微高地上にも集落の存在が想定されたため、調査によってその有無を確定し、同時代の集落像が埋没谷の両岸に及ぶかを検討する。

### 4. 研究成果

#### (1) 徳島市三谷遺跡について

徳島市三谷遺跡は、吉野川下流南岸に位置する。現在鮎喰川の主要な旧河道とみられる埋没谷は、眉山北西麓に沿って北東方面に山麓に形成された崖錐状の微高地を避けるように蛇行する。その蛇行部には自然堤防やポイントバーなど、両岸に微高地をもっていた。当時の内湾に近い最下流部に三谷遺跡は立地する(図1)。

1924・1925年の調査では、埋没谷が北西方向から南東側眉山裾方面へ流下する南西岸付近を検出し、流木や貝塚を検出したという。その後、1990・1991年の調査では、1924・1925年検出の埋没谷が眉山裾で北東方向へ蛇行した北岸側に面する低湿地に形成された自然凹地に、貝塚が検出された。多量の遺物が廃棄されていた。貝塚の標高は約0.5~0mである。多量の遺物が廃棄されていた。8体にもおおよぶイヌの埋葬がみられ、未製品を含む24点にもおおよぶ石棒が出土していることなどから、祭祀の場も兼ねていた可能性が高い。中部高地や九州北部から中四国西部など、遠隔地の土器やサヌカイト大型剥片などもみられ、外部との交易にも開かれた中心的集落であったと考えられる。貝塚からは、栽培種のアズキと多量のイネがみられ、レプリカ法でアワ・キビが相当数検出されている。貝塚の内容をみると、内湾から汽水域に棲息する魚類が卓越する。石錘の出土がなく、ヤスが多いことから、内湾での潜水漁撈活動が想定される。貝類はハマグリ・ヤマトシジミ・ハイガイ・マガキなどがみられ、内湾漁撈とあわせて砂堆・干潟の展開する付近の環境が推察される。狩猟はイノシシ・シカが大半を占めた。イチイガシを中心とする採集活動もおこなっていた。以上の生業を組み合わせることがわかる。すなわち、内湾漁撈と眉山での狩猟・採集活動に適した立地環境を基盤に、イネ・アワ・キビ・アズキの小規模農耕をたくみに組み合わせていることが想定される(勝浦・市川編2018〔2〕)。

上記の貝塚や儀礼空間のみられた埋没谷北岸には微高地の存在が想定されたため、2015年~2017年に、おもに初期農耕の復元を目的とした調査をおこなった(中村編2017〔3〕)。その結果、居住域と目される遺構を検出した。居住域の立地する微高地の現地表面は1.8mをはかる。標高約1.6mにおいて、縄文晩期末の遺構・遺物を確認できた。竪穴住居跡や複数の土坑を検出し、凸帯文土器と遠賀川式土器の共存とみてもよい出土状況を確認している。

#### (2) 今回の研究による調査

今回の研究では、1990・1991年検出の貝塚・儀礼空間に対応する、埋没谷北東岸微高地に位置する居住域の広がりや遺構密度や、低湿地へ至る緩傾斜地の土地利用を明らかにし、縄文時代晩期末の集落像復元へむけての資料蓄積をはかった。

2018・2019年、貝塚の北西約50mの位置に合計約20m<sup>2</sup>のトレンチを設け、当該期の遺構検出をおこなった。現地表面は、標高約1.8mである。耕作土20cmの下に、中近世までの各時期の土器を包含する、厚さ約10cmの黒褐色土(第2層)がみられる。第2層を掘削すると、標高約1.5m前後で、縄文/弥生移行期~古代の遺構面である、黄褐色~赤褐色シルト(第3層)に達する。この第3層は現地表面下わずか30cmに位置し、安定した微高地として長期間生活域として機能していたと考えられる。出土した縄文/弥生移行期の遺構は、いずれも土坑で、凸帯文土器、古相の遠賀川式土器、石鏃、打製石斧などが出土している(図2)。一方で、大陸系磨製石器の出土はみとめられない。三谷遺跡全体でも大陸系磨製石器の数は限られており、弥生文化受容の一形態として注目される。遺物出土量、遺構密度とも多くはない。時期も縄文/弥生移行期1型式のあと、弥生中期前葉まで断絶がみられる。短期間に営まれた集落といえる。

現在調査可能な限界の地点まで調査をおこなったが、貝塚の位置する低地へ向かう緩傾斜を確認することはできなかった。しかしながら、低湿地に面する貝塚と隣接する微高地上の居住域との組み合わせを確認し、当該期の集落景観の一端を明らかにすることはできた。

一方で、貝塚の面する埋没谷の対岸、すなわち南西側の低湿地にも1924・1925年の調査にお

いて、詳細は不明ながら、貝塚がみつまっている（森 1926a [4]・b [5]）。付近からは石棒や弥生時代初頭の土器の出土記録があり、さらに南西側の微高地にも、縄文／弥生移行期の遺構が想定された。そこで、2019・2020年に、当該微高地の検出を目的とする調査をおこなった。

トレンチは20㎡で2か所設定した。現地は畑で、現地表約2.3mである。表土と、近世の水田層を取り除くと、標高約2.1mで黒褐色シルト層に達する。黒褐色シルト層からは、縄文／弥生移行期から古代ごろまでの遺物が出土する。黒褐色を取り除いた、標高約2mで弥生中期後葉の竪穴住居跡を検出した。トレンチが狭いため、住居跡の1/4程度を検出するにとどまったが、中央に炉跡を持ち、柱穴2つを検出した。弥生中期後葉の遺物が出土しているものの、土器や石器はともに少量である。大型の有茎鏃1点を検出した。この竪穴住居調査後、床面を取り除いていると、標高約1.8mで土坑1基を検出し、凸帯文土器を検出した（図3）。大型の胴部破片であり、編年の明確な決め手となる凸帯文を欠いていた。しかし、器面のケズリ調整、器壁の厚さや胎土から判断して凸帯文土器であることは間違いない。内面にスガが一定程度付着しているの

で、いずれ機会をみて年代測定をおこないたい。

### (3) まとめ

以上の結果、縄文／弥生移行期の遺構としては、貝塚と隣接する微高地上の生活域に対して、埋没谷の南西側にも微高地が存在し、土坑の存在が確認された。この微高地に縄文／弥生移行期の住居跡が存在するのかわかりませんが、河川が蛇行する両岸微高地に、生活域が存在し、低湿地に面して貝塚（廃棄空間）・儀礼空間をとともなう形式の集落像を復元することができた。この集落は、地域社会の中心的存在であったとしても、遺跡存続期間は1、2型式程度と短く、比較的遺構密度の低い状態で展開していることもあきらかとなった。この集落像の復元は、西日本における縄文時代晩期末ではほとんど判明していないので、今後の研究展開に一定の貢献を残すものと推察される。

三谷遺跡は、内湾・汽水域付近を蛇行する埋没谷に近接した微高地に生活域を置く。灌漑水田稲作経営を軸にするには向かない土地条件にある。アワ・キビ・アズキなどの畠作農耕を微高地の縁辺部などでおこない、稲作を水場付近でおこなって、内湾漁撈など既存の生業のなかに組み込んだとみてよいだろう。石棒祭祀が健在である点からみても、農耕は集落と地域社会のかたちを決して崩してはいない。遺物の内容からも、地域の中心的集落であったことはまちがいないといえる。

三谷遺跡の西方600mほどに位置する徳島市庄・蔵本遺跡では、弥生前期中葉には十分な緩傾斜をもちながら推定1万㎡を超える面積で灌漑水田稲作をおこなっている。しかし庄・蔵本遺跡の立地環境は、内湾漁撈の盛んな三谷遺跡の内容と比較検討してみても近接しすぎているようにみえる。この間若干の海水準後退を想定しておいてもよいだろう。すなわち縄文晩期末、内湾に面して形成された黒色～褐色の粘質／シルトが、若干の海退にもなつてのちに水田適地となった可能性を考えておきたい。

三谷遺跡では、すでに生業の一つとしてイネ・アワ・キビ・アズキなどの農耕をおこなっていたものの、既存の生業を背景とする集落形態・地域社会を持続していた。弥生前期中葉に本格的な灌漑水田稲作経営へと飛躍する背景のひとつに、若干の環境変化も想定しておきたい。

### (参考文献)

- [1] 勝浦康守編 1997『三谷遺跡』徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会
- [2] 勝浦康守・市川欣也編 2018『三谷遺跡 一本編分冊・自然遺物編』徳島市教育委員会
- [3] 中村 豊編 2017『縄文／弥生移行期における農耕の実態解明に関する研究(26370897)』日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書
- [4] 森 敬介 1926a「徳島市水道三谷濾過池に於ける原始独木舟発見の顛末上」『歴史と地理』第18巻第1号
- [5] 森 敬介 1926b「徳島市水道三谷濾過池に於ける原始独木舟発見の顛末下」『歴史と地理』第18巻第5号



図1 三谷遺跡

※○は住居跡、●は貝塚、縦楕円は石棒  
 国土地理院USA-R527-1-107より作成



図2 北東側微高地検出遺構



図3 南西側微高地出土凸帯文土器

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 久保脇美朗・高島芳弘・湯浅利彦・中村 豊	4. 巻 1
2. 論文標題 徳島県の外来系土器の概要	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中四国地方の外来系土器	6. 最初と最後の頁 205-216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村 豊・端野晋平・三阪一徳・河原崎貴光	4. 巻 1
2. 論文標題 縄文 / 弥生移行期の集落について - 徳島市三谷遺跡の調査から -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本考古学協会第84回総会研究発表要旨	6. 最初と最後の頁 36-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村 豊	4. 巻 1
2. 論文標題 稲作主体でない複合的農耕の探究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 境界の考古学	6. 最初と最後の頁 251-262
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村 豊	4. 巻 1
2. 論文標題 稲作主体でない複合的農耕の探究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本考古学協会2018年度大会研究発表要旨	6. 最初と最後の頁 54-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久保和士・石丸恵利子・勝浦康守・川添和暁・久保禎子・高島芳弘・中尾賢一・中沢道彦・中村 豊・那須浩郎・丸山真史	4. 巻 1
2. 論文標題 徳島市三谷遺跡における生業と植物利用	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 第12回九州古代種子研究会鹿児島大会発表要旨集 - 縄文集落と植物利用 -	6. 最初と最後の頁 50-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村 豊	4. 巻 702
2. 論文標題 徳島市三谷遺跡の発掘調査	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 34 - 35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村 豊	4. 巻
2. 論文標題 四国地方の集落と遺跡群 - 沖積平野に立地する後晩期集落の一考察 -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 縄文文化の繁栄と衰退 - 後晩期集落と地域社会の広域比較 -	6. 最初と最後の頁 37-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村 豊	4. 巻 1
2. 論文標題 列島西部における縄文晩期末大型石棒盛行の背景	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 二十一世紀考古学の現在	6. 最初と最後の頁 297-307
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 端野晋平	4. 巻 67 - 4
2. 論文標題 壘制からみた弥生時代の始まり - 徳島地域をケースとして -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 地方史研究	6. 最初と最後の頁 4-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 中村 豊・端野晋平・三阪一徳・河原崎貴光
2. 発表標題 縄文 / 弥生移行期の集落について - 徳島市三谷遺跡の調査から -
3. 学会等名 日本考古学協会第84回総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村 豊
2. 発表標題 稲作主体でない複合的農耕の探究
3. 学会等名 日本考古学協会2018年度大会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 久保和士・石丸恵利子・勝浦康守・川添和暁・久保禎子・高島芳弘・中尾賢一・中沢道彦・中村 豊・那須浩郎・丸山真史
2. 発表標題 徳島市三谷遺跡における生業と植物利用
3. 学会等名 第12回九州古代種子研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村 豊
2. 発表標題 四国地方の集落と遺跡群 - 沖積平野に立地する後晩期集落の一考察 -
3. 学会等名 シンポジウム 縄文文化の繁栄と衰退 - 沖積平野に立地する後晩期集落の一考察 -
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中村 豊
2. 発表標題 徳島・吉野川下流域における先史・古代の農耕について
3. 学会等名 地方史研究協議会第68回徳島大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	三阪 一徳  (MISAKA Kazunori)  (00714841)	九州大学・人文科学研究院・助教   (17102)	
研究分担者	端野 晋平  (HASHINO Shinpei)  (40525458)	徳島大学・埋蔵文化財調査室・准教授   (16101)	
研究分担者	河原崎 貴光  (KAWARAZAKI Takamitsu)  (80351360)	徳島大学・大学院社会産業理工学研究部(社会総合科学域)・准教授   (16101)	